



桑原 忠義 整形外科部長
くわばら・ただよし ●1993年、東邦大学医学部卒業、新潟大学附属病院、東邦大学医療センター大橋病院勤務を経て、2000年より三愛病院、日本整形外科学会認定整形外科専門医

治療においても、それぞれに特定分野に強い医師が在籍しています。私は大腿骨頸

最小侵襲人工骨頭置換術で手術当日からの離床を実現

桑原 手術に支障がないと判断されれば、受傷後24時間以内の手術が行えます。骨折の場合、当院で取り扱う患者さんの8割が70歳以上の高齢者ですが、速やかに手術を行い、早期の離床を実現させることは、術後の感染症予防、早期社会復帰といった点だけではなく、認知症発症の予防にもつながります。

桑原 手術に支障がないと判断されれば、受傷後24時間以内の手術が行えます。骨折の場合、当院で取り扱う患者さんの8割が70歳以上の高齢者ですが、速やかに手術を行い、早期の離床を実現させることは、術後の感染症予防、早期社会復帰といった点だけではなく、認知症発症の予防にもつながります。

桑原 手術に支障がないと判断されれば、受傷後24時間以内の手術が行えます。骨折の場合、当院で取り扱う患者さんの8割が70歳以上の高齢者ですが、速やかに手術を行い、早期の離床を実現させることは、術後の感染症予防、早期社会復帰といった点だけではなく、認知症発症の予防にもつながります。



済陽 輝久 理事長
わたよう・てるひさ ●1975年、東邦大学医学部卒業。78年まで同大学整形外科に勤務。日赤医療センター麻酔科、磯子中央病院勤務を経て、85年に三愛病院設立。97年、医療法人社団松弘会理事長

医療法人社団 三愛病院

三愛病院では、人工骨頭置換術や経皮的椎弓根スクリュー挿入システムなどの高度手術を実施し、最小侵襲手術による早期社会復帰を実現している。その根底には、整形外科だけでなく総合診療を行い、疾患の早期発見と早期治療を実践しようという基本理念がある。

診療科目： 外科、整形外科、脳神経外科、内科、循環器内科、消化器内科、消化器外科、リハビリテーション科、放射線科、形成外科、泌尿器科、麻酔科(長野治和)、呼吸器外科、歯科、リウマチ科、心臓血管外科、皮膚科

診療時間： 平日 9:00~17:00/土 9:00~12:00 休日： 日・祝
TEL: 048-866-1717(代) URL: http://www.sanai.or.jp
〒338-0837 埼玉県さいたま市桜区田島4-35-17



ワークステーションの動画がみられます

取材/別当律子 撮影/中川良輔

人工骨頭置換術など高い技術による低侵襲手術を実施 早期社会復帰を目指して総合診療を徹底する

医師をフォローするドクター秘書制度を採用

済陽 「三愛病院という名前には、第一に患者さんへの愛と思いやりの心、第二に地域を愛する心、そして第三に医療に奉仕する心という、三つの愛が病院経営の根幹にあります。その思いは病院の隅々まで貫かれています。小さなことかもしれませんが、病院内には季節の生花を飾ったり、絨毯張りによって、患者さんに優しく、温かいイメージを与えるような環境づくりを行っています。

桑原 私たち医師は、オーダーリングシステムにより業務の効率化やサービスマン向上を図っています。ドクター秘書がいることにより、書類作成はもとより、患者さんのデータの整理や、医師の回診・病状説明の後、患者さんが理解できたかどうかの確認などの業務を担当してくれ大変助かっています。

済陽 書類作成をはじめとする医療関連業務をドクター秘書に任せることで、医

部骨折における人工骨頭置換術や、人工股関節置換術を担当しています。人工骨頭置換術の場合、従来の手術法では15~20cm程度切開し、大腿骨頭を後方に回転させて引き抜いていました。しかし、この術式では筋肉も切開するため脱臼が起こりやすく、それを防ぐ意味でも術後の離床が遅くなり、患者さんに大変な負担がかかっていました。そこで、私は後ろに引き抜くのではなく、下に向かって引き抜くことで切開部も5cm程度にとどめ、筋肉も切開しない術式、最小侵襲人工骨頭置換術を考えました。この術式は切開部位が小さいため、手術時の出血が少なく、また、筋肉を切開しないために、術後すぐに離床できるだけではなく、脱臼のリスクも軽減できます。

桑原 入院期間も大幅に短くなりました。従来の術式では50日程度の入院が必要でしたが、平均17日で退院が可能になりました。また、患者さんの体に与える負担が少ないので、高齢者であっても手術を受けることが可能です。過去には101歳の患者さんがこの手術を受け、その日から歩行できた例もあります。

中嶋 私は脊椎脊髄疾患を担当しています。取り組んでいるのは、経皮的椎弓根スクリュー挿入システムです。腰椎すべり症といった、脊椎の固定が必要な症例

師は本来の業務である診察や診断、治療に専念できるようにしました。ドクター秘書は、患者さんの病態や心理面も医師に報告するなど徹底しています。医師にはなかなか話せなくても、ドクター秘書に話せばいいというところもあり、患者さんと医師との仲介役になって、よりスムーズなコミュニケーションを図っています。

済陽 患者さんにとっては、いざ、緊急事態が起きたときに頼れる病院ほど、頼もしい存在はないと思います。当院では24時間体制で外傷患者さんの受け入れを行っています。

桑原 救急については、私が受け入れを行っています。骨折などの場合、必要があればできるだけ早く手術を行い、早期の離床を可能にすることで術後のQOL(生活の質)が高まること、データでも実証されています。そのため当院では、骨折が疑われる患者さんが搬送された場合、レントゲン撮影などの救急処置を行い、その画像をもとに迅速で的確な診断を行い、各種検査が進められていきます。

中嶋 筋肉を大きく切開する必要がないため、術後の痛みが従来の術式に比べ大幅に軽減されました。そのため患者さんが術後早い時期から動くことができ、その分、回復も早いですね。

済陽 認可の下りる時間の長さの問題もあり、アメリカで始まった新たな医療技術は、数年遅れて日本での取り組みが始まるといわれています。そこで当院では、アメリカに渡って先取りで研修を重ね、日本でも認可が下りたときにはいち早くその技術を取り入れることができるような体制を整えています。常に新たな技術を取り入れる努力をすることは、患者さんの負担を減らすことにつながります。そのため

中嶋 私は脊椎脊髄疾患を担当しています。取り組んでいるのは、経皮的椎弓根スクリュー挿入システムです。腰椎すべり症といった、脊椎の固定が必要な症例

患者さんの負担を減らすために常に新たな技術を取り入れる

患者さんの負担を減らすために常に新たな技術を取り入れる



中嶋 祐作 医師
なかじま・ゆうさく ●1995年、日本医科大学卒業後、日本医科大学附属病院勤務。2007年より三愛病院、医学博士、日本整形外科学会認定整形外科専門医

に用いられる術式で、従来は1椎間10cm程度の切開が必要だったのに対し、ナビゲーションシステムを使い、最小の傷口から固定具を挿入させることで、切開部位を最大でわずか3cm程度までに抑えることができます。

済陽 脊椎の固定を必要とする症例の場合、ほぼすべての症例をこの術式で行っています。

中嶋 筋肉を大きく切開する必要がないため、術後の痛みが従来の術式に比べ大幅に軽減されました。そのため患者さんが術後早い時期から動くことができ、その分、回復も早いですね。

済陽 認可の下りる時間の長さの問題もあり、アメリカで始まった新たな医療技術は、数年遅れて日本での取り組みが始まるといわれています。そこで当院では、アメリカに渡って先取りで研修を重ね、日本でも認可が下りたときにはいち早くその技術を取り入れることができるような体制を整えています。常に新たな技術を取り入れる努力をすることは、患者さんの負担を減らすことにつながります。そのため

患者さんの負担を減らすために常に新たな技術を取り入れる

患者さんの負担を減らすために常に新たな技術を取り入れる

患者さんの負担を減らすために常に新たな技術を取り入れる

この1冊で整形外科のすべてが分かる…保存版

首から腰、膝、手足までの痛みを解決!

1月31日(火)いよいよ発売!!

予価1,000円(税込) お問い合わせは03-3212-3256(土・日・祝日を除く10:00~17:00) 毎日新聞社・出版営業部まで

毎日ムック 毎日新聞社の健康・医療ムック

後悔しない病院選び 整形外科読本

【編集監修】日本整形外科学会理事長・九州大学大学院医学研究院整形外科学教授 岩本 幸英